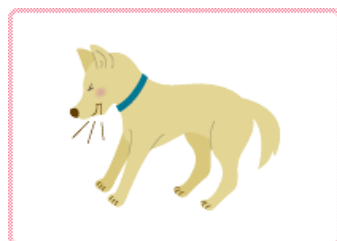


フィラリア症予防について

- ・フィラリア症とは、蚊によって媒介されるフィラリアという寄生虫が原因の病気です。
- ・心臓に約15～30cmの糸状のフィラリア成虫が寄生し、循環障害など様々な問題をもたらします。
- ・フィラリア症は死に至ることもある怖い病気ですが、予防薬を飲むことによって100%予防が可能な病気です。

1. フィラリア症の症状

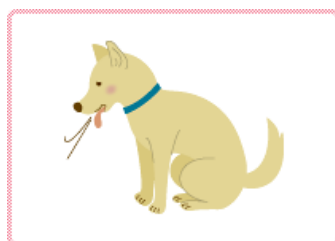
フィラリア症の場合、主に次の症状が認められます。



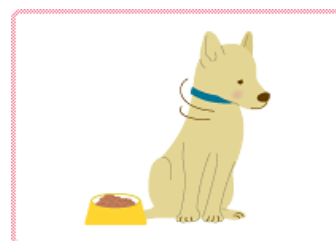
セキが出る



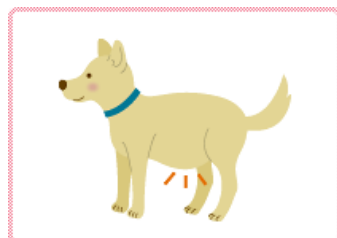
元気がない



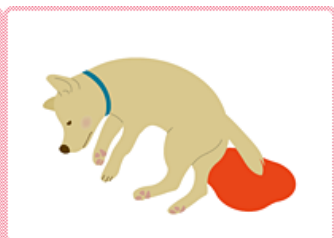
呼吸が苦しそう



食欲がない



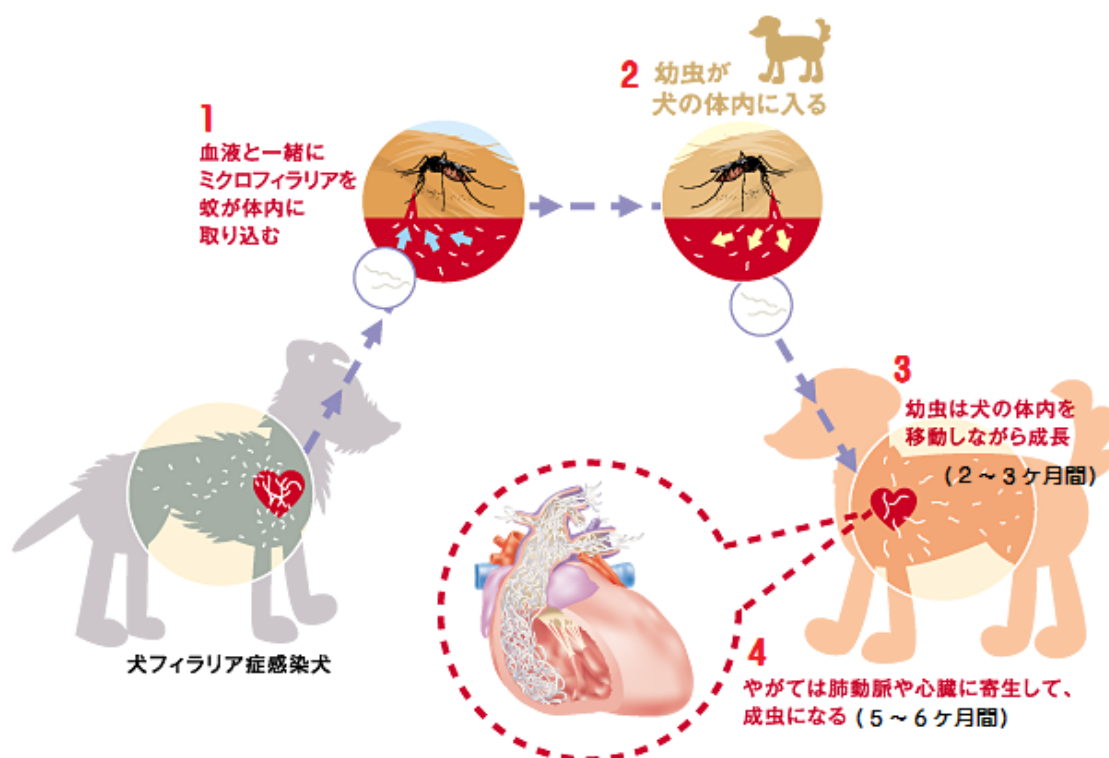
お腹が膨らんできた



尿が赤くなる

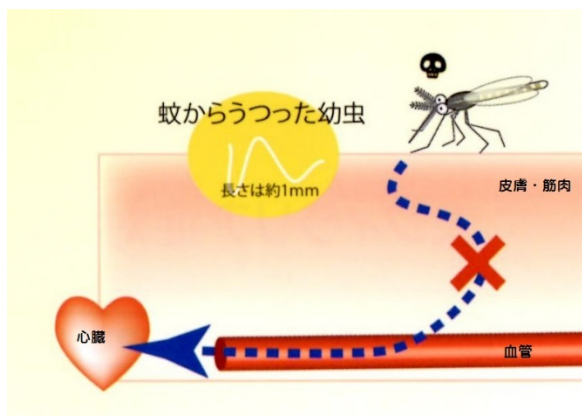
2. フィラリアの感染経路

蚊がフィラリアに感染したワンちゃんを吸血した際に、蚊の体内にフィラリアの幼虫が侵入します。フィラリアの幼虫は蚊の体内で成長し、感染能力を持ちます。次に蚊がワンちゃんを刺したときに、感染能力を持った幼虫がワンちゃんの体内に移動し、新たな感染が発生します。



3. フィラリア症予防薬の仕組み

犬フィラリア症の予防薬は、実はフィラリアの感染自体を予防するお薬ではなく、体内に侵入したフィラリアの幼虫を皮膚や筋肉を移動している間に駆虫し、血管や心臓への移動を防ぐお薬です。



(前述図上、3の時に駆虫します)

ここでフィラリアを退

4. 投薬期間と回数

蚊が出始めてから約1ヵ月後に投薬を始めることで、それまでに体内に侵入したフィラリアの幼虫を駆虫します。お薬は翌日以降に蚊に刺されて体内に侵入したフィラリア幼虫には効かないので、再び1ヵ月後に投薬を行い駆虫します。

この様に蚊の発生時期には1ヶ月ごとの駆虫を繰り返し、蚊が発生しなくなったあと1ヵ月後まで投薬を行います。最後の投薬はとても重要で、蚊がいなくなったからと投薬を行わないと、翌シーズンまでに体内でフィラリアが成長を続け、フィラリア症になってしまいます。

子犬の場合の投薬について

- ・蚊がいる時期に生まれた子は生後8週齢を過ぎてから予防を始めます。
- ・蚊のいない時期に生まれた子は蚊が出始めてから予防を始めます。

5. 予防薬投与前の血液検査

フィラリア症に感染しているワンちゃんに予防薬を投与してしまうと、血管内のフィラリアが死亡して、ショック症状を起こすことがあります。そのため、毎シーズン、投薬前にフィラリア症に感染していないか血液検査を行い、感染していないことを確認してから投与を始めます。



この地域では5月から12月の間、毎月1回予防薬の投与を行います！